

## ニューカレドニア日食速報

秦 茂

ニューカレドニアは人口14万、日本の四国位の大きさの島である。この日食情報が配られる頃は、映画“天国にいちばん近い島”が上映されて、この島の美しさが紹介されている筈である。

11月19日午後、羽田からのJALチャーター機で、福岡、グアムを経由して、この島最大の都市ヌメアのトンツータ国際空港に到着したのは翌20日の早朝である。

日食行のことだから、天候についての不安は、いつでもつきまとうが、今回の日食ではその上に更に心配が重なった。

第一の天候については、到着した20日、21日ともに天候が思わしくなく、ようやく日食前夜の星空の美しさに、一つだけは不安が取り除かれた。第二の心配は、JTBのパンフレットでは、海上観測に使う船は、フランス船籍、モアナII号(約1,000トン)となっていたのに、直前の説明会で、使える船はキャップ・デ・パン(350トン)だと説明を受ける。外海に出たらピッチング、ローリングで、甲板上に三脚も置けないのではないかと日食時の太陽高度が高いので、甲板上にねころんで、ダイヤモンドリング、コロナをしっかりと見とどけるのがせい一杯なのではないだろうか。

そして第三の不安は、私達一行が現地に入る前後に、この島では、重要な選挙が行われていた。後で分ったことなのだが、選挙は二つの派閥の、ニューカレドニアをそのままフランス領にして置く組と、独立を目指す組との激しい抗争だったのである。選挙はフランス領派の勝利に終わったのだが、その直後に反対派が暴動を始めたのである。新聞紙上にも、民衆のデモ隊を鎮圧する装甲車、ヘルメット姿の軍隊などの写真が載り始めたのだが、日食の前々日、私達を日食中心線に運ぶ貨物船、キャップ・デ・パンが暴動に巻き込まれるのを恐れて港を離れているとの電話が入った。この様な状況のもとで、日本からの49名のアマチュアは日食前夜を迎えてしまったのである。

22日夜、港に停泊していた350トンの船、キャップ・デ・パンを見た時には、そこに船があったという喜びで、船の小さなことなど全く忘れてしまっていた。

港を離れて、船が闇に包まれる頃、カノーブス、アケルナー、ハウマルハルトが一列になり、南に大、小マゼラン雲がくっきりと見えて来る。あとの心配は第二の船のゆれだけと考え乍ら、船室であまり良く寝つかれない一夜を過す。23日早朝5時5分頃の日の出は素晴しかった。クロワッサン・コーヒーの朝食をすませると、間もなく、船はエンジンをかけたまま、停止している様子である。

観測点は、経度164°57'2E、緯度22°2'1Sと船側から通告して来る。私達が使える甲板は、殆ど、三脚で一杯になった。何人かは、上甲板に場所をとった。

日本からの49名の他に、フランス人11名、アメリカ・カナダからの参加31名の計91名の見物客、観測者で、甲板は一杯になった。風速は5m、第二接触の前には船のエンジンの音も消えた。

コロナは南北にポーラー・プリュームが見え、赤道方向の流線の他に不規則に三本の細い流線が拡って見えた。コロナの周囲には明るい星が三つ位、そして流線の間にも一つ星が光っていた。最後に、皆既中の海の色が、おそろしい程、私には印象的であった。